

ミスターがじゅまる

商業市立朝日小学校　一　ねん　はまだ　りょう

「たるうのじいちゃんのおはかのうしろには、でっかいがじゅまるがたっています。みきはきよじんのまじらうとくって、はっぴはぶつなぶつ。かせがぶくやぶつやぶつとやぶれるのです。ながいながいはげねにぶらぶらがして、

「あああー」

とおお「えをだしながらなるみたいにあそぶのが、たるうはだいちぎです。

あるひ、たるうがいつものようにターザン「う」をしていると、ひくいひくい「えがき」えてきました。

「おいおい、そのほつす。わしのたのみをきいてくれんかい。」

「たるうはびつくりして、つかまっていたひげねからどすんとおちてしまいました。

「こててて。だれだ、もしかしてじいちゃんか。」

きよるきよるあたりをみまわしながらたるうがきくへ、

「うしろじゃ、うしろ。うしろをみてみ。」

「たるうはぶりむきました。でもうしろにはだれもいません。

おおきながじゅまるがあるだけです。

「わしはがじゅまるじゃよ。みなにはミスターがじゅまるとよばれておる。」

「きがしゃべったあ。」

「たるうはよろよろしながら、じいちゃんのはかのかけにかくれました。そして、そおとのぞいてみると、またそのきはたるうにはなしてきました。

「しんばいせんでいい。だいじょうぶじゃよ。ちょっとしたたのみがあるだけじゃ。」

「それって、どんなたのみな。」

やさしそつなかんじだし、なんだかだいすきだったじいちゃんに「ているきがして、たるうはがじゅまるにちがついてみました。

「このまえのたいふうで、だいじなだいしなひげねがくちやくちやくにからまってしまったのじゃよ。それをうしろにかほひこくへんかぬ。」

「たるうがよくみてみると、あうちうちひげねがくちやくくちやくにからまっています。

「よし、わかった。ほく、からまりをほくのとくいなんだ。ほどこいてあげるから、ちやくとまってね。」

「たるうは、ほくきほくめました。たかいと「う」のからまりをするすうとのほつてほくきました。かたくなう「う」の「う」

そこから入におちているきのえだをつかっほくきました。おもったよりもじかかかかったけれど、いっしょうけんめいほくきました。

「やったあ、ぜんぶほくいたぞ。」

「たるうはあせでぐへぐへとなりながら、こっこりわらいました。

「ありがとう、ありがとう。おまえのおかげでたすかった。おれいに、なにかひとつだけねがいをかなえてあげよう。」

「ええっ、そんなことできるの。」

「たろうはおどろいてききました。」

「わしは、ただのきじゃないんじゃないよ。二匹のやさしいにんげんのねがいを、ひとつだけかなえることができるんじゃないよ。」

「たろうは、かんがえました。うんとうんとかんがえて、ひとつのねがいをきめました。」

「ねえ、ミスターがじゅまる。どんなねがいでもかなえてくれるの。」

「もちろんじゃよ。」

「それなら、いまのぼくのねがいはひとつだけね。」

「どんなねがいのかね。」

「しんだじいちゃんに、もういちどあいたいんだ。」

「ほう、それはむずかしいねがいじゃのう。でも、おまえのためじゃ、やってみよう。」

「ミスターがじゅまるがそつじつじゅめんがへへらとゆねはじめました。」

「たろうは、たれかがたろうのきをなげきたくれました。」

「たろうは、おおきくなつたな。」

「それは、だいすきなじいちゃんでした。いっしょにすもつをこつたり、じゃんけんをしてくれたりしたじいちゃんでした。」

「たろうは、おおきくなつたな。」